SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2022　授賞結果発表!!

国際コンペティション

フランス作品『揺れるとき』（Softie）がグランプリ受賞!

国内コンペティション優秀作品賞

長編部門は『ダブル・ライフ』（余園園監督）

短編部門はアニメーション作品『サカナ島胃袋三腸目』（若林萌監督）

報道関係者各位

平素より大変お世話になっております。
“若手映像クリエイターの登竜門”として次代を担う新たな才能の発掘を目指す「SKIP シティ国際 D シネマ映画祭」は、2019 年以来 3 年ぶりのスクリーン上映と、オンライン配信を併用した初のハイブリッド開催として、7 月 16 日（土）より 19 回目の開催を迎え、本日 7 月 24 日（日）のクロージング・セレモニーにてグランプリほか各賞を発表いたしました！

国内コンペティションでは、国内から公募しノミネートされた短編部門 8 作品の中から優秀作品賞に『サカナ島胃袋三腸目』（若林萌監督）、観客賞に『ストレージマン』（萬野達郎監督）が、長編部門 6 作品の中から優秀作品賞に『ダブル・ライフ』（余園園監督）、観客賞に『ヴァタ　～箱あるいは体～』（亀井岳監督）が選ばれた。さらに国内コンペティションの審査員による審査を経て国際コンペティション・国内コンペティションを通じた国内作品の中から今後の長編映画制作に可能性を感じる監督に授与される SKIP シティアワードに『Journey』（霧生笙吾監督作品）が選ばれ、それぞれの作品の監督たちは喜びの声を上げ、鶴田法男(映画監督)、月永理絵（ライター）、芦澤明子（撮影）３名の国内コンペティション審査員たちからはお祝いのコメントが寄せられました。

続いて国際コンペティションでは、国内外から長編映画制作本数が 3 本以下の監督による 60 分以上の作品を公募しノミネートされた 10 作品の中から、最優秀作品賞（グランプリ）にフランス作品『揺れるとき（英題：Softie)』（サミュエル・セイス監督)、監督賞にフランス、ドイツ合作『マグネティック・ビート』（ヴァンサン・マエル・カルドナ監督)、審査員特別賞にボリビア、ウルグアイ、フランス合作『UTAMA～私たちの家～』（アレハンドロ・ロアイサ・グリシ監督)、観客賞にロール・カラミー主演のフランス作品『彼女の生きる道』（セシル・デュクロック監督）が選ばれた。来日監督のコメントや、松永大司（映画監督)、ナム・ドンチュル（釜山国際映画祭プログラム・ディレクター)、寺島しのぶ（女優）３名の国際コンペティション審査委員長によるお祝いのコメントも寄せられました。

最期に、土川勉ディレクターならびに奥ノ木信夫映画祭実行委員会副会長（川口市長）の挨拶の後、国際コンペティション最優秀作品賞を受賞した『揺れるとき』の上映を終え、16 日から 9 日間にわたり開催されたスクリーン上映に幕を閉じました。なおオンライン配信は、引き続き 7 月 27 日（水）23:00 まで開催中です。

授賞作品および審査員、受賞者のコメントは次ページ以降のとおりです。
ご多用とは存じますが、ぜひ貴媒体にてご紹介のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

ＳＫＩＰシティ国際Ｄシネマ映画祭２０２２　受賞結果一覧

《国際コンペティション》

最優秀作品賞（グランプリ）

『揺れるとき』

サミュエル・セイス監督　（フランス／英題：Softie）

監督賞

『マグネティック・ビート』

ヴァンサン・マエル・カルドナ監督　（フランス、ドイツ／英題：Magnetic Beats）

審査員特別賞

『UTAMA～私たちの家～』

アレハンドロ・ロアイサ・グリシ監督（ボリビア、ウルグアイ、フランス／英題：Utama）

観客賞

『彼女の生きる道』

セシル・デュクロック監督（フランス／英題：Her Way）

《国内コンペティション》

SKIP シティアワード

『Journey』　霧生笙吾監督（日本）

優秀作品賞（長編部門）

『ダブル・ライフ』　余園園監督（日本、中国）

優秀作品賞（短編部門）

『サカナ島胃袋三腸目』　若林萌監督（日本）

観客賞（長編部門）

『ヴァタ　～箱あるいは体～』　亀井岳監督（日本、マダガスカル）

観客賞（短編部門）

『ストレージマン』　萬野達郎監督（日本）

国際コンペティション　受賞作品

【最優秀作品賞（グランプリ）】　賞金 100 万円

『揺れるとき』

監督：サミュエル・セイス
2021 年｜フランス｜93 分｜英題：Softie｜©Avenue_B

■受賞コメント

サミュエル・セイス監督
今回、様々な美しい作品、美しい才能たちと出会えたことに感謝いたします。この映画についての話をしますと、スタートから非常に面白い旅路でした。プロデューサーのキャロリーヌさんとご一緒できたことが、僕としてはとてもラッキーだったと思っております。本作は、少年の幼少期を描くというものでしたが、年齢的にも映画的にも非常に美しい時代を捉えようという試みでした。また、それも一つのチャンスだと思いました。我々はいまこのコロナ禍において苦難の時代を迎えているわけですが、なかなか映画館に足を運んでもらえないという問題を抱えています。が、皮肉なことに映画を作る側としては、再び活力が漲る状態になっています。様々な物語が語られはじめ、技術革新によって新たな領域への挑戦が始まっているので、観客の皆さんが再び映画館へ足を運んでくれるといいなと希望を抱いています。というのは、やはり映画というのは人と一緒に共同体験するべきものだと僕は信じているのです。

キャロリーヌ・ボンマルシャン プロデューサー
今回来日させていただき、その中でなかなかコミュニケーションが上手くいかなかったり、そういったことを肌で感じる経験もしました。その中で改めて感じたのが、映画という芸術が非常に大切なコミュニケーション・ツールで、そして伝わるツールなんだということです。本作で我々はフランスを描いているわけですが、それが日本の観客の皆さんに伝わったこと、それがこの映画というアートが機能しているということの証拠だと思いました。

■審査委員長コメント　寺島しのぶ（女優）※ビデオメッセージ
この映画は審査員みんな心を打たれました。特に、最後の最後まで主人公の男の子から目を離せず、彼の演技は彼自身が持っているものなのか、そしてどうやって監督は彼をあのように導くことが出来たのか、とても素敵な映画でしたし、最後にちゃんと夢がある。そういうところに映画としての完成度の高さと、未来を感じました。素晴らしい映像をみせていただいたと思っております。個人的には、このコンペティションの 10 本あるなかの 5 本がフランス出資であるという点に、フランスはお金があるんだなあ、と思いました。やっぱり芸術に対する理解がフランスとは違うんだなというところを、私たち日本人は見せつけられてしまいました。どうかこの作品に配給がついて、たくさんの人に観られることを祈っています。

【監督賞】　賞金 50 万円

『マグネティック・ビート』

監督：ヴァンサン・マエル・カルドナ
2021 年｜フランス、ドイツ｜98 分｜英題：Magnetic Beats

■審査員コメント　松永大司（映画監督）
まず、このようなコロナという状況、このような環境のなかでお客さんも入って映画を観られることが一映画好きとしてとても素晴らしいと思いました。大変な状況のなか映画を作り上げた監督やスタッフの皆さんは、一生忘れないのではと思います。僕自身の話になりますが、監督デビューをしたのが 2011 年 3 月 26 日、東日本大震災があった時でした。劇場にお客さんが来ない中で監督デビューをしたことは、一生忘れることがないです。あの時は大変でしたが、これが一つの大きな経験として、お客さんに観てもらうということが今でも映画を作り続ける原動力になっています。そして今回監督賞として選ばせていただいた『マグネティック・ビート』ですが、久しぶりに自分の映画好きな気持ちを思い出させてくれた作品でした。とにかく音の使い方が上手く、ワクワクしながら観ました。家の環境では感じられない音の設計に、映画館で映画を楽しむことを一観客としてワクワクできたこと、これが本当にこの作品において監督の大きな力だと思いました。一作目にして驚くべき才能、大いに刺激を受けました。

※監督コメントなし

国際コンペティション　受賞作品

【審査員特別賞】　賞金 30 万円

『UTAMA～私たちの家～』

監督：アレハンドロ・ロアイサ・グリシ
2022 年｜ボリビア、ウルグアイ、フランス｜87 分
英題：Utama｜©AlmaFilms

■受賞コメント　アレハンドロ・ロアイサ・グリシ監督
ナム・ドンチュルさんの美しいコメントに感謝いたします。この映画祭に参加させていただいたおかげで、私が昔から敬愛している日本の文化を、今回堪能させていただくことが出来、本当に有難い気持ちで一杯です。

■審査員コメント　ナム・ドンチュル（釜山国際映画祭 プログラム・ディレクター）
※ナム・ドンチュルさんは都合により欠席のため、松永大司さんが代読
まず今回のコンペティション作品は、どれも非常に感心しました。審査員としてだけでなく、いち観客として映画を堪能することが出来ました。審査員 3 人で様々な審議をさせていただきましたが、貴重な時間を共にすることができ、自分自身としても大変すばらしい体験となりました。またみなさんにお会いできることを楽しみにしています。審査員特別賞の『UTAMA～私たちの家～』は映画の魔法の力で我々観客を別世界に誘ってくれる作品でした。この映画を観ていると、私たちのさまざまなものに対する偏見が取り除かれます。例えば、未開より文明のほうが正しいのか、あるいは老いより若さのほうが果たして望ましいのか、そういった疑問が頭をもたげるわけですが、この作品から受け取れることはそういった物事の成否ではありません。ありのまま受け止めることが必要なのだと感じさせられました。そして何より、この作品に登場する老夫婦の生きざまに敬意を抱かずにはいられませんでした。審査員一同『UTAMA～私たちの家～』が湛える独特な映画的な魔法を称賛いたします。

【観客賞】

『彼女の生きる道』

監督：セシル・デュクロック
2021 年｜フランス｜95 分｜英題：Her Way｜©Domino Films

※監督コメントなし

SKIP シティアワード　受賞作品

『Journey』

監督：霧生笙吾（きりう・しょうご）
2022 年｜日本｜60 分｜英題：Journey｜©霧生笙吾

■受賞コメント　霧生笙吾監督
正直、受賞は絶対ないだろうと思って会場に来て、どうやって帰ろうかなと考えていました。この映画は大学の卒業制作で作りまして、昨日の上映には担当教授も来ていて、上映後にちょっと怒られて帰ったので…。まず足りないことだらけで、課題は山積みだと思っています。色々な意見をいただけて、自分の課題の多さに気づかせてくれた作品だと思います。でも逆に作る楽しさも、今回の制作を通して学べたので、次回は SKIP シティの機材をめちゃくちゃ使って、また SF 映画を撮りたいなと思います。

■審査委員長コメント　芦澤明子（撮影）

SF 映画というのは小さな規模ではなかなか入り込めない難しいものだと思うのですが、そこに果敢に挑戦したという点に期待を込めて、この賞を差し上げたいと思いました。この SKIP シティにある機材を好きなだけ使って、使い倒して、SKIP シティの人に嫌がられるくらい通い詰めて素敵な作品を作ってください。次回作を期待しています。

※SKIP シティアワードは、国際コンペティション・国内コンペティションを通じた全ての日本作品の中から、今後の長編映画制作に可能性を感じる監督に対して授与する賞です。受賞者の次回企画に対し、SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザの映像制作支援施設・設備の一定期間の利用を提供します。

国内コンペティション　受賞作品

【優秀作品賞（長編部門）】　賞金 30 万円

『ダブル・ライフ』

監督：余園園（よ・えんえん）
2022 年｜日本、中国｜103 分｜英題：Double Life

■受賞コメント　余園園監督

トロフィーがすごく重いですね。今回、このような素晴らしい映画祭で上映されて、すごく幸せです。これからもっと頑張りたいと思います。

■審査員コメント　月永理絵（ライター）

全作品を通して日本映画の様々な側面を見ることができました。その中でも本作は、いくつもの日本映画を参照しながらも、そこからどのようにオリジナル作品を立ち上げることが出来るか、とても真摯に向き合った作品だと感じました。そして何よりも、映画的としか言いようのない素晴らしい瞬間がたくさん溢れていました。人の手と手が触れ合う瞬間の喜び、眼差しが交差するまでの緊張感など、身体の動作や視線によって物語を立ち上げていこうという強い力を感じました。主人公が新しい一歩を踏み出すまでを記録した映画でしたが、監督自身が今後どのような新しい一歩を踏み出されるのか、とても楽しみにしています。

【優秀作品賞（短編部門）】　賞金 20 万円

『サカナ島胃袋三腸目』

監督：若林萌（わかばやし・もえ）
2022 年｜日本｜17 分｜英題：3 Intestine Road, Fish Island
©2022 Moe Wakabayashi

■受賞コメント　若林萌監督

この作品が一本のフィルムになるまで沢山の人の力を借りて、ようやく完成まで漕ぎつけました。キャストの３人、音楽担当、音響、作画、仕上げを手伝って下さった方々、本当にありがとうございました。3 年ぶりのリアル開催で上映できたことも本当に嬉しいです。

■審査員コメント　鶴田法男（映画監督）

国内コンペティションの短編部門は今回、ジャンルも言語も多種多様でした。その中で何故この作品を選んだかというと、非常に多様で豊かな発想が綺麗に纏め上げられている点。私はそこに感心しました。審査員全員が言っていましたが、監督だけでなくこの作品に関わっている皆さんの才能が素晴らしく、今後大きく期待できると思いました。音楽も素晴らしかった。実はもう一本『こねこ』が非常に素晴らしく、残念ながら二本は選べないので、協議した結果『サカナ島～』を選ばせていただいたことを付け加えさせてください。また個人的なことですが私は J ホラーの父と呼ばれておりまして、女性の若さや美醜への執着をテーマにした楳図かずお原作の『おろち』という映画を作っています。今回、同様のテーマを持った『喰之女』という中西舞さんが撮られた作品があり、個人的には何とかしてあげたいなと思いました。

国内コンペティション　受賞作品

【観客賞（長編部門）】

『ヴァタ ～箱あるいは体～』

監督：亀井岳（かめい・たけし）
2022 年｜日本、マダガスカル｜85 分
英題：VATA｜©FLYING IMAGE

■受賞コメント　亀井岳監督

マダガスカルで制作した映画ですので、現地の方々にまずはお礼を申し上げます。本作は「共有すること」がテーマになっています。映画では死者と生きる人々が共有する。今回の映画祭では、海外の映画監督と交流をしたり、観客のみなさんの生の声を聞く素晴らしい機会をいただけて、改めて共有することの大切さをこの映画を通して伝えていきたいと思いました。

【観客賞（短編部門）】

『ストレージマン』

監督：萬野達郎（まんの・たつろう）
2022 年｜日本｜39 分｜英題：Storage Man
©MANTRIX PICTURES

■受賞コメント　萬野達郎監督

コロナを題材にした本作。日本やみんなで「ちょっと頑張っていきたいな」という想いを込めて撮った映画だったので、それが観客の皆さんに刺さって受賞できたこと、本当に嬉しく思います。

審査委員長 総評

○国際コンペティション審査委員長　寺島しのぶ（女優）※ビデオメッセージ

現場に伺えず大変残念に思っております。このパンデミックの中、皆さんが力を合わせ、それでも作品を作り続ける意欲に、何度も心を打たれました。今回のコンペティションでは、生と死、生きていくもの、死んでいくもの、残されたもの、その人たちが後退したり前を向いたり、そんな生死に関わるテーマが多くあったような気がします。私もこの 10 本の作品を観て、何度勇気をいただいたかわかりません。このように映画を作った皆様に、心から敬愛の意を表します。

○国内コンペティション審査委員長　芦澤明子（撮影）

驚くべきレベルの高さにびっくりしました。しかも、その多くがコロナ禍という厳しい環境での撮影で、本当に大変だったろうと思います。望むと望まざるに関わらず、やはりコロナ禍を経てのこれからの未来というものの表現が、各々の作品に出ていたという点が、今までの作品とは違うところだなと思いました。本当なら皆さんに賞を差し上げたいと思うぐらい、いろいろな賞も考えました。いまどきはオンラインなど手軽に見られる方法はあるけれど、やはりスクリーンで観てこそ映画と確信しています。映画祭のようにこういった有難い環境を与えられたということは、皆さんにもよかったと思いますし、残念ながら今回は受賞できなかった作品も、ここで上映されて観ていただいたということに誇りと自信を持って、次の作品に挑んでいただきたいと思います。

主催者コメント

〇大野 元裕　（SKIP シティ国際映画祭実行委員会会長／埼玉県知事）

今回ノミネートされた 24 本の作品は、コロナ禍の影響で思うように撮影が進まなかったり、映画館での上映が制限されるなど厳しい状況にも負けず、若手クリエイターが希望を胸に映画への情熱を注いだ力作ぞろいです。この粒ぞろいの作品の中から各部門の受賞作品を選考するに当たって、審査員の皆様はさぞかし頭を悩ませたことと思います。今回の審査を引き受けていただいた 6 名の最終審査員の皆様は、若手クリエイターがチャンスをつかむ場としての映画祭の意義を深く御理解くださり、新たな才能に出会うことを楽しみにしてくださったと伺っています。映画制作を志すクリエイターたちへの温かい愛を持って審査を引き受けてくださった皆様に、改めて深く感謝申し上げます。今回受賞された方も、惜しくも受賞を逃された方も、彼らに続き、その豊かな才能に一層の磨きをかけて飛躍されることを、本映画祭の全ての関係者が願っております。今後も映画制作を志す方や、新たな才能を心待ちにする映像業界から期待される場であり続けるため、SKIP シティ国際 D シネマ映画祭を盛り上げてまいります。

〇奥ノ木 信夫　（SKIP シティ国際映画祭実行委員会副会長／川口市長）

途中経過ではありますが、今回の映画祭には来場者 3500 人以上、オンライン配信は 1000 人以上にご視聴いただいております。スクリーン上映は本日で終了いたしますが、オンライン配信は 27 日まで続くので、視聴者数はまだまだ伸びるのではないかと思います。先ほど表彰が行われましたが、国際コンペティション最優秀作品賞に選ばれた『揺れるとき』監督のサミュエル・セイスさんをはじめとする、それぞれの部門で受賞作品の制作に関わられた、監督や全てのスタッフの皆様に心からお慶びを申し上げます。昨年のオンラインでの授賞式で「来年こそは大きなスクリーンで映画祭を楽しんでいただきたい」とメッセージを残しましたが、それが実現できたことは本当に皆さんのおかげと思っております。

〇土川 勉　（SKIP シティ国際 D シネマ映画祭ディレクター）

今年の映画祭は、3 年ぶりにここ SKIP シティの会場で、全コンペティション作品のスクリーン上映をすることができました。会場にお越しいただいた国内の監督たちからも、自分の作品を大きなスクリーンで観ることができ、そして観客の反応が直接伝わり、自分の作品に新たな発見があったと喜んでいただくことができました。審査員の皆様から授賞理由を頂きましたように、今年も各コンペティションはそれぞれの作品の力が拮抗していて甲乙つけがたく難航致しました。違った立場で映画に接してきた審査員の皆様は、それぞれが違った映画の解釈で、一本一本丁寧に審査して頂きました。本当に映画は、観る人の人生を反映するものであることを実感いたしました。最後に、ウクライナに一日も早く平穏な日常が取り戻せることを祈り、また来年もこの場でお会いしましょう。本当に有難うございました。

《本リリースに関する画像素材等は、以下 URL よりダウンロードいただけます》

https://drive.google.com/drive/folders/11zEY7Acx7dj3s0ERjfEgH2j4FE88stE_?usp=sharing

《本映画祭のプレス資料、全上映作品の画像素材、映画祭ロゴ画像などは以下 URL よりダウンロードいただけます》

https://drive.google.com/drive/folders/1Yjc2rD54r4sB1mMSsweaECF12cUZMP_Q?usp=sharing

SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2022（第 19 回）開催概要

■会期：《スクリーン上映》2022 年 7 月 16 日（土）～7 月 24 日（日）
　　《オンライン配信》2022 年 7 月 21 日（木）10:00 ～ 7 月 27 日（水）23:00
■会場：SKIP シティ映像ホール、多目的ホール（埼玉県川口市）、メディアセブン（埼玉県川口市）ほか
■オンライン配信：特設サイト（Powered by シネマディスカバリーズ）にて配信
■主催：埼玉県、川口市、SKIP シティ国際映画祭実行委員会、特定非営利活動法人さいたま映像ボランティアの会
■公式サイト：www.skipcity-dcf.jp

＜お問合せ＞　SKIP シティ国際Dシネマ映画祭事務局　広報：堀切
TEL: 048-263-0818　MOBILE: 090-4228-2342　E-Mail: press@skipcity-dcf.jp ／ horikiri@skipcity.com